

と言えるだろうか。今でもわずかに残っている「焼畑」が土地に根ざした合理性を持ち、技術を必要とする農業形態だとわかり、発展途上国の焼畑農業を後進的と決めてしまう間違いに気づかされた。高齢者は村で充足した生活をおくっているが、若者は高校から高知市内に流出し、村内に魅力ある雇用の場を創出できないまま、山村の過疎化が止めようもなく進んでいく現状もあった。

後期が始まるとすぐに巡検報告がグループごとに出され、素早く製本され、立派な冊子になって手渡された。厳しくハッパをかけるわけではなく流れを作っていく内田先生の学生操縦術の巧みさには見習うことが多かった。

2, 3年生と一緒に講義を受けていたのでだんだん顔見知りの学生も増えてきた。「今どきの学生」の素顔も見えてきた。特に巡検終了後の後期には3年生とおしゃべりもできるようになって「学生生活」を大いに楽しんだ。自分の娘と言ってもおかしくない年頃の学生たちであったが、普段教師の立場で見ている高校生と違い、仲間としての会話ができ、学生の立場から見た授業や、大学、高校に対する不満も聞くことができた。

開発地理や地理学特講Ⅴなどゼミ的な講座では、学生たちのとらえ方が違うことに気づいた。戦争に行った父、空襲を経験した母を持つ私に対して、

彼女たちは石油危機後に生まれ、豊かな時代を過ごしてきた。彼女たちは他人事のように日本の過去や第三世界をとらえている。高校生も彼女たちと同じようにとらえているのではないか。経験だけに寄りかかっているとは思われないものがある。当然分かっていると思っている歴史認識が共通でないことを理解しないと、こちらの考えも伝わらない。お互いの考えを分かり合う難しさ。だからこそ伝わったときの嬉しさ。

先生方にとっては、研究者でもない者が講座をかき回してご迷惑であったことだと今更ながら反省しているが、1年間でいろいろ覗いてみたい私にとっては、とても居心地の良い教室だった。学生時代、もっと真剣にいろいろ挑戦しておけば良かったのと思いつつ、めいっぱい楽しんだのかもしれない。先生方、助手の山田さんには本当に感謝している。3年生に社会人入学の藤掛さんがいたことの意味も大きい。私にとっては学生との距離を縮める格好のサポーターだった。地理学科のみなさんに対してお礼の気持ちをどう表現したらいいか分からないが、勤務先の生徒たちに、今回知った視点を示すことで学ぶ楽しさを伝えていきたい。

## プブとその人々

森 本 泉

ポカラ市郊外にあるダムサイドは、ペワ湖の湖畔にある。ツーリストがボート遊びをする湖の対岸には青々とした森が広がり、晴れの空にはマチャブチャレ(魚の尻尾という名のとおり、頂上が魚の尻尾のように見える山)が白く鮮やかに浮き上がっている。ダムサイドの沿道を埋めるホテルやレストラン、旅行代理店、それに建築途中の建物や山積み資材があちこちに見受けられる。ツーリストがちらほら通り過ぎる道を、牛や水牛がゆったりと歩き、寝そべったりしている。道より少し内側に入れば、鶏や豚の鳴き声も聞こえてくる。ダムサイドはガイドブックにツーリストエリアとして紹介されているが、喧騒とはおおよそ

無縁で、時間がゆったりと流れている。

### プブとの出会い

プブ(父方の叔母に対する呼称)に初めて会ったのは1994年の春、私が初めてネパールへフィールドワークに出掛けた時のことである。彼女の名前はアーサ・マヤ グルン、ポカラ出身の65才の女性である。グルンというのは、ネパールの民族集団の一つである。19世紀末以降、特に世界大戦において、勇敢な兵士として世界に名を馳せたグルカ兵を多く輩出してきた民族集団でもある。

プブは約40年前にダムサイドの住人となった。彼女が移住してきた頃は、何もなかったというダムサイドに、ホテルやレストランなどが建ち並ぶ



自分が写っている写真を見て喜ぶ  
左は甥のバル・バハドゥール グルン

ようになったのは1970年代半ばを過ぎてからという。現在に至る過程を、プブは間近に見てきたのだ。彼女は、ダムサイドにかなりの面積の土地を所有している。彼女の父親が、独身者の娘が今後生活していけるようにと、買い与えたものである。その土地の観光客がよく通る場所に、甥のバル・バハドゥール グルンが、10年程前に旅行代理店を開いた。プブはそのオフィスのすぐ裏手に土拭きの二階建ての居を構え、ずっと一人で住んでいる。ボタンで前を留める仕様のお腹が見える丈のブラウスに、ルンギ(筒状の腰巻き)、パトゥカ(ルンギを留めたり物を挟むための長さ1-2m、幅30-40cmの帯)という装い、寒い時にはショールを巻く。薄くなった髪を頭の後ろで小さなお団子にまとめているのが、何ともかわいらしい。日本でいうところのビーチサンダルをつっかけ、どこへでも出掛けていく。家には水道が引かれているが川で洗濯をし、農繁期には親類縁者の畑を手伝いに行く。オフィスで働くジーバンにサングラスで恰好つけている人たちを前に、身振りも派手に演説していたりするプブの様子が観光客の好奇心をそそるのか、若い観光客たちが一緒に写真を撮りたいと言って、プブを訪ねてくる。もちろん、機嫌良く一緒に写真におさまるのである。彼女の弟たちも、ダムサイドでホテルを営んでいるのだが、弟や友達のホテルに出掛けては、観光客と一緒にお酒を飲んだとか、ガジャ(マリファナ)を吸ってきたとか、楽しそうに報告してくれる。

## ダイという人

そもそも私がアーサ・マヤ グルンをプブと呼ぶようになったのは、バル・バハドゥール グルンと知合ってからである。聴き取り調査に協力してもらって以来、仲良しになったバル・バハドゥール グルンは、自分がお前のダイ(兄)となって面倒を見るから何でもいってきなさい、と声をかけてくれた。その言葉に甘えて世話になっているうちに、彼を通じてアーサ・マヤ グルンをはじめ、多くの人々と知合うことになった。こうしてダイがプブと呼ぶアーサ・マヤ グルンを、私もプブと呼ぶようになったのである。

ネパールでは、一般に年上の男性に対してダイと呼びかける習慣がある。私個人の乏しい経験から断言することはできないが、呼称としてだけでなく、ダイとバヒニ(妹)の家族的な関係を確立すると、ダイはバヒニに対して実によく面倒をみるようである。因みに、ネパールにおいて兄弟姉妹で呼びあう範囲は、実際の家族の兄弟姉妹はもとより、従兄弟やそのまた従兄弟など、遠い親類縁者にまで及ぶ。その事情を知らない頃は、紹介してくれる兄弟姉妹の多さに驚いたものである。

## 日々の生活

ダイのオフィスは、十数年前にプブがディクリ(頼母子講のような金融講)で当てた資金で建てたものである。その他3軒の建物を人に貸しており、プブ自身は昔ながらの古い家に住みながら、大家業から現金収入を得ている。弟達と共有ではあるが、近年地価が上昇したダムサイドに広い土地を持っており、周囲はプブのことを金持ちだと噂するが、本人は実に質素な生活をしている。

ダイのオフィスはプブの家に隣接しているため、プブの友達がよく遊びに来る。彼女達の目当てはテレビで、広くもないオフィスにグルンのおばさん達が3-4人、座り込んでテレビを見ていたりする。オフィスで働くダイのバンジ(姉妹の娘)のシータ グルンは、業務妨害だと陰でブツサ文句を云うが、面と向っては何も云えない。グルンの人々が入り出す中、本来の業務は旅行代理業であるから、外国人も頻繁に入り出す。外国生活が長いラフレ(外国に出稼ぎに行くゲルカ兵のこと)の妻たちの中には英語を喋る人もいるが、プブは生活空間に飛交う英語を聞きかじって、英

単語を口にするようになった。例えば、オフィスに入る時は、朝でも晩でも good morning と胸を張って大声で挨拶をするし、夜は sleeping と云って部屋に戻っていく。気分が良い時には good, そうでない時には no good という具合に。因みに、プブの母語はグルン語で、ネパール語はダムサイドに移住してから覚えた言葉である。近所のグルンの友達と喋る時は、グルン語で喋っているし、かつてグルカ兵の弟が病気になった時に、看病のために暫くインドに滞在していたことがあったので、ヒンディー語も理解する。また、信心深いプブが若かりし頃、ポカラに寺を建てるとして滞在していた日本人僧侶の世話をしていた時に覚えたといつて、「南無妙法蓮華経云々」とお経を唱えて聞かせてくれたりする。

プブの一日は、プジャ(神様へのお祈り)をすることから始まる。早朝に起きだし、部屋に設えた神棚に向ってプジャをする。水浴びや掃除、買物をして、9時頃にダルバート(豆汁とおかずとご飯)を作り始める(ネパールの都市部では、一般に午前中と夜の二回、ダルバートの食事をする)。ダイが食べないとプブは食事を作らなくなるので、家が近くにありながらもダイはプブのところで朝のダルバートを食べる。プブは「ダイが食べるからごはんを作らなきゃならないんだよ、全く大変だよ」とはいうものの、満更でもなさそうである。朝、おかずを作る準備を手伝って、ニンニクの皮を剥いたりしていると、「こんなことしなきゃならないなんて、女は大変だよ」といつたりする。私がカメラを持っていると、「女の苦勞を撮りなさい」といつて、洗い物や食事の準備をしながらポーズをとる。口では大変がっているが、実際はじっとしてられない性分で、近所で評判の働き者である。私も朝はプブのダルバートを食べさせてもらっており、ごはんやおかずを目まいがするほど山盛りについでくれたものである。私が世話になっていたホテルのサフニ(女主人)やシータもよく食事によんでくれ、そんな時にはプブの食事を断るのだが、「美味しいから食べなさい」とおかずをとっておいてくれたりする。ホテルのサフニのところでご馳走になると、「何のおかずを食べたのかい?美味しかったかね?」と聞く。「美味しいからあんたにとっておいたおかずがある。食べなさい」と勧めてくれるので、プブのおかず

を美味しいといつて食べると、満足そうに頷く。

日が暮れると、プブは「ネパールのロキシー(焼酎)を飲むかい?」と誘いに来る。一日の仕事が終わると、毎日ではないが、美味しいおかずを作ったから、とか、村から知合いがロキシーを持ってきてくれたから、といつてはプブの友達が集まってくる。プブの部屋で酒盛りが始まるのである。話題はラフレやその子供達のことが多い。韓国で4年間働いて戻ってきた知合いの息子が家を建てたとか、また別の知合いの息子は出稼ぎに行つたまま4年間帰つてこないが、現地の女と結婚してしまつたんじゃないかとか、あそこの息子は大学で学位をとつて、今度は修士課程にいくといつている、といつたことが話題になる。その他に、どこかよその地域に出掛けた時の話も多い。ラフレの妻たちは、グルカ兵の夫について香港やシンガポール、オーストラリア等での外国生活経験が豊富なのだ。国内の宗教的聖地にもよく出掛けており、お参りした時の話にも花が咲く。お参りの時に雪のある所で水行したり、食事制限があったことを、物見遊山に行つてきたかのように、楽しそうに話してくれる。お酒の席での話の中で、プブの十八番は、幼かりし頃の「武勇伝」である。プブは12才の時に親に結婚させられたのだが、相手が厭で、相手の顔に唾を吐きかけて逃げ帰つてきたという。この話を、唾をプップッと吐く真似をしながら誇らしげに語る。幾度となく繰り返された話を、彼女たちはおかずをつまみ、ロキシーのグラスを傾けつつ、取留めもなく続けるのである。

#### プブの村へ行く

1996年の冬支度が始まる頃、プブは「trekking guide をしてやる、お金はいらない」といつて、彼女の生まれ育つた村に連れて行つてくれた。これといつのも、彼女の弟や甥が、trekking guide をしてツーリストを村に連れていつた話をよくするものだから、彼女も一度 trekking guide なるものをしてみたかつたのである。ダムサイドの近くからバスに乗り、山道に揺られること小1時間、ペディ川のほとりのバス停で降りて、鬱蒼と茂る森の山道を登つてゆく。視界の開けたところで「ほら、もう私の村が見えたよ」とプブの指す方を見ると、遙か彼方に鉄塔の頭が見えた。その鉄



村に向かう

塔の下を通過してプブの村に着いたのは、それから3時間程歩いてからであった。途中、プブは疲れたから休憩しようといつて石に腰を下ろすのだが、10秒もしないで歩き出してしまふ。口笛を吹くようにヒューヒューと長く息を二回吐くと、息が整うのだそうだ。あちこちでロキシーを御馳走になりながら、坂道をスタスタ登っていく。本当に65才のおばあさんなんだろうか…。実際、プブの村は山の斜面に張り付くように広がっており、どこへ行くにも坂を上り下りしなければならなかった。平らな埋立地で育った私は、65才のプブの健脚に驚いた。

村に入ると、山肌を段々に覆う黄金色のコード(紫黒ビエ)畑の中で、働く女達の姿が見受けられた。村は折しも、コードの刈入れの時期であった。道を歩きながら、「娘の頃はよく刈入れを手伝ったものだ、こうやってコードを収穫するんだよ」と畑に入って穂を刈ってみせてくれた。家々の庭には、刈入れのすんだコードの小さな紫黒色をした実が、きれいに均されて天日に晒されていた。

そこを鶏がコードの実を蹴散らしながら、啄んでいたりする。おばあさんがそれをザルで追い払う。そこには素朴だが、何ともいえない豊かさを感じる光景があった。

村の道を歩いていると、太いベルトをお腹に巻いて、古めかしい銃を携えて歩いている初老の人に会った。昔、グルカ兵として外国を転々としていたといつて、一連の敬礼の動作をしてみせてくれた。ラフレの多い村だからか、立派な二階建ての家が多い。ひとつの家に、だいたい8部屋あり、その他に納戸や家畜小屋がある。家の壁には、グルカ兵の制服を着て銃を小脇に携えた若かりし頃の写真や勲章が飾られていたりする。

プブと親類縁者の家をあちこち訪ねると、彼らは水牛の乳やコードのロキシーを勧めてくれた。残念ながら私は坂道を歩くことを考えてアルコールは控えたが、絞ったての水牛の乳は実に甘かった。陽も暮れかけてきた頃に山を下ることにするが、その翌日にボカラでグルンの葬式があるとかで、それに参加するという4人の道連れができた。いずれも女性である。先程まで畑の中でクルタ・スルワール(ラフなブラウスとズボン)を身に付け、頭にショールを巻き、サンダルを履いて竹籠を背負っていた女の子が、ジーンズのスカートにチョッキ、黒い編み上げ靴という装いで、肩には小さなリュックをかけ、颯爽と現れてきた。村にいながらにして、今時のファッション雑誌からそのまま抜け出したような服装をしているのには驚いた。他の女たちは、少し年輩であったこともあって、カラフルなTシャツによる行き用のルンギを合わせ、お洒落なジャケットをはおっていた。バスで約一時間、山を下る。満員の熱気と山道の揺れのため、もどす人がバスのあちこちにいたものだから、かなり苦痛な一時間であった。同行の4人のうち2人は、その晩プブの家泊ることになり、例によってプブの部屋では酒盛りが行われた。ダイも加わり、村のグルンの様子やボカラのグルンの様子が話題になって、盛り上がっていた。

#### プブとその人々

プブの姪の娘にあたるのだが、プブが孫と呼んでいるシータは、ダイのオフィスで働いている。世話好きで働き者のプブに似ており、プブのことをあれこれと世話をやく。一時期、私はシータの



鶏を買う

家に泊めてもらったこともあって、シータの両親は私をナニ(娘)と呼んでくれる。シータのプア(父に対する呼称)はインド軍のラフレで、1996年に退役した。私が行くときいつも「やあナニ、来たかい。家におあがり」といって暖かく迎えてくれる。とても心配性で、シータが定刻を30分過ぎてもオフィスから帰ってこなかったりすると、ダムサイドから歩いて10分もかからない距離にある家から、免許取りたてのバイクをプスプスいわせて、オフィスまで迎えに来る。私に対しても、痩せたんじゃないか、ご飯を食べているのか、お金は足りているのか、等々いろいろ心配をしてくれる。アマ(母に対する呼称)も心配性である。初めて会った時から私に髪を切らないように注意していたのだが、実は私が女に見えないのを気に病んで

いたのだそうだ。幸か不幸か、ネパール滞在中、美容院に行くのをためらっているうちに髪が伸びてしまっただけなのだが、髪が伸びたのを見て喜んでいて。更には、チベット人の友達が、「女になるために」と私の耳にピアスをするための穴を開けてくれたのだが、それを目にしたアマは、「これでお前も女になったわね」と喜んでくれた。片耳に10個ずつ、計20個の金のピアスをつけているアマは、「お前も私くらい、たくさん穴を開けなくちゃ」という。意味するところは、たくさんの金をつけられるように、ということなのである。金のピアスやネックレス等の装飾品は、豊かさの一つの象徴であり、一種の貯蓄にもなる。身に付けておけば紛失の恐れも少ないというが、プブは酔っ払った勢いで数万ルピー(1ルピーは約2円)の真珠のボテ(首飾り)を知合いの娘にあげ、更には騒いだ勢いでフリ(鼻にするピアス)をなくしていた...

昔は「ものすごい美人」だったといわれるプブの顔には、今では深い皺が刻まれ、前歯数本を残して歯がない…。ダムサイドのゆったりした時間の流れの中で、プブは確実に年月を重ねている。私がダムサイドで過した時間は、通算で3ヵ月間ほどにすぎないが、それよりもずっと長い時間をそこで過してきたように思える。プブをはじめ、その人々と過した時間が、そう思わせているのだろう。